

『閔敬吾著作集』（全九巻）

——昔話研究論文について——

武田正

先生の著作集が今後の民俗学研究に及ぼすであろう影響は測り知れないものであるし、特に、口承文芸研究の分野においては、単に日本の口承文芸研究の水準を示すだけでなく、世界における日本の昔話研究の成果として誇り得ることもある。えて先生と呼ばせていただくには、いささかの私事もからんでいるのだが、先生が永い闘病生活からようやく回復された時に、先生の推輓で小著「昔話世界の成立」をまとめることができたこともあり、つぎつぎに論文を発表されて、昔話研究の方向を私どもに示唆されたことで、どれだけ多くの研究者たちが、力を与えられたかといふことである。本著作集六巻の年譜によれば、先生の昔話研究は昭和三年四月の「旅と伝説」に寄せられた「舟幽霊の話二題」からはじまる。当時を回想されて、「たまたま私の友人の兄が「旅と伝説」という雑誌を編集していて、何か郷土のことを書け

といわれて、子供の頃、母が語ってくれた昔話を榎木敏というペンネームで書いたのが最初でした。それからも日々書いていたと、編集者が柳田国男先生に会ってみたらとしばしばすすめました。といっても、私は自身は昔話の研究者になるつもりは全くなく、偉い先生だからお顔ぐらい拝見しておこうという軽い気持で訪問しましたら、先生にぜひやるようにとすすめられたので「昔話研究の思い出」（本集三巻）と言わられるが、故郷鳥原の伝説をまとめるながら急速に昔話の研究に入られたのは、昭和十一年の「昔話の採集」（本集卷一）からである。雑誌「昔話研究」によつて、先生の語学力を駆使されたの国外説話類型との比較は「犬と猫と指環」説話比較資料（本集四巻）をはじめとして、大著「比較研究序説」（本集六巻）となつて完成されたと見

柳田と先生の共編になる「昔話採集手

帖」が生れた昭和十一年には昔話の研究の意義は何かということについて、「昔話研究の為に」（本集一巻）で昔話の民俗学的研究の重要性の認識と比較説話学について「昔話は大きく見て二つの性質をもつ。第一は形式類型に定った型があり諸民族間に多くの一致があること。第二はかかる普遍的性質の上に更に地域的・民族的特徴をもつこと。前者は昔話発生の条件、場所、時及び伝播の仕方を主たる問題とする比較説話学の課題である。我が国の昔話研究の場合には後者が主要な問題となる」と指摘されている。そして「昔話研究における民俗学の役割」（本集一巻）では共同体としての村落社会における口承文芸の役割が單なる昔話の蒐集とか、民謡やわらべ歌の歌詞の研究にとどまらずに、「語る」こと、「歌う」ことの、共同体内部での意味の研究でなければならないとし、共同体内部における「共同の精神的産物」として昔話を見るという立場から、昔話の発生の新旧を云々することも大切な問題ではあるが、昔話の生成、変化発達を見ることの大切さをも御自分の課題とされたのであつたと思われる。

昔話」と「派生昔話」は日本民俗学における昔話研究の一つの礎石であったことは当然であるが、それは「桃太郎の誕生」における日本昔話の分析を通しての、「あるいは自然の帰結であつたろうが、先生は比較説話学の立場、あるいは民族学的な立場から「我が國昔話の若干の型」（本集三巻）で、すでにアルベルト・ヴェセルスキーやフィンランド学派がグリムの採集による昔話の分析を科学的に重ねていてこれを紹介し、モチーフ分析を通して三分類説たる「動物昔話」「本格昔話」「笑話」説に近い立場を意識されたのは昭和十三年のこの論文によって理解できるように思われる。

しかも、このような分析を通しての分類が、ヨーロッパでは幾多の学者によつて行なわれているものが、日本では柳田だけであるとして、柳田の分類を骨子にして「誕生・婚姻・繼子譚・兄弟譚・致富譚」の六種をあげ、モチーフによる分類案を示している。

東大の図書館勤務のかたわら、埼玉とか千葉などに土、日曜を採集に出かけたり、夏休み、冬休みを利用しての地方での採集の中から、「村の役場へ行つて、古いことを知つている人を紹介してもらつても、こ

つちで必要のない話であつたり、それでも断わるわけに行かないから、だまつて聞いている。そういう繰返しの中から、地方地方での昔話の比較研究が生れ」てくると言ふ。刻明なモチーフ分析を通して、やがて「日本昔話集成」が生れてくることになる。この間、国内の資料を丹念に蒐集してはモチーフ分析を行ないながら、絶えず昔話における「語り」の問題を取り上げて、それは日本民俗学の形成期といふこともあつて、柳田を助けながら民俗研究の意味を確定しながらであつた上に、第二次大戦下という異常な事態でもあつたことも関係がないとは言えまい。「昔話と婚姻様式」（本集一巻）「昼むかし」（本集三巻）「昔話の伝承」（本集三巻）「大歳の昔話」（本集四巻）などである。

戦後の五年間は民俗学開花の時期であつたが、先生の時間の大半は「日本昔話集成」のための長い長い準備の期間であったと思われる。「集成」の第一部「動物昔話」が刊行されたのが昭和二十五年、完結を見たのが昭和三十三年であるが、日本における昔話研究の礎石がこうして出来上がったと言えようが、その間、昔話の社会性の追求が始まられていることは驚異的なことである。「昔話の宗教的基礎に関する覚書」（本集一巻）では遊魂信仰の所在を、「昔話と社会環境」（本集一巻）では「語り」の社会階層や昔話の中に盛られた社会批判を取上げると共に、日本の昔話研究が世界的視野で行なわれて行くために「民話」（本集五巻。本集では「民話I」として収録されている）を岩波新書で刊行されたのである。この著作はしばしば難解であるとして敬遠されたと聞くが、日本で最初の、昔話研究の国際比較を可能にした著作だと言つてよいのではないか。そして先生はフィンランドのアルネの説をもつて、昔話の意味と内容を整理したうえに、昔話は社会的慣習を反映したものであることを、「異類婚姻譚」「通過儀礼としての昔話」さらに「繼子譚」の分析を通して立証されようとしたのが「日本民俗学大系」の「民話」（本集五巻では「民話II」として収録）であった。これは先生の学位請求論文「日本昔話の社會性に関する研究」（本集一巻）となって、先生の研究の到達点を示すと共に、従来の日本民俗学のとつて収録）であった。これは先生の学位請求ってきた昔話研究が固有信仰の究明にあると考えられて来たことに対しても、昔話研究の独自性を確立したこと、昔話が人生の通過

儀礼たる「誕生」「成年式」「成女式」「婚姻」そのものであるとする点で、新しい研究の方向をもわれわれに示してくれたものである。

本格昔話とされるものを大別して「人間の誕生」「通過儀礼としての昔話」「婚姻」の三つに分けて詳細に論じた上で、「昔話と昔話のモチーフとは自ら別個のものである。昔話はすでに述べた通り、構造的に見れば個々のモチーフあるいは挿話の複合によって一個の独立した、なんらかの意味をもつた完全な昔話が形成される。これが昔話の型である」とし、モチーフ分析に終始した従来の研究に改めて、構造分析の視点を強調され、「民族の生活・共同体における日常生活、とくに個人の生活においては必然的に経過すべき生活段階、いかえれば誕生から結婚にいたるまでの過程を語るものである。昔話の諸事件は單なる空想の所産ではなく、社会慣習を内容とし、現実的信仰を反映するもの」としたのである。

語り継がれてきた昔話の分析を通して日本にある昔話の分類と意味を探ることで取残されてきたものは昔話の歴史を辿ることであった。戦前においてもすでに「縫福米

福考」「蛇聾入譚の分布」「羽衣考」（共に本集四巻）に折りにふれて日本古典を引用されているが、「竹取物語の構造と意味」（本集四巻）「婚姻譚としての住吉物語」（同上）などを通して、昔話の歴史的変遷を追求してまとめられたのが「昔話の歴史」（本集二巻）である。柳田の鋭い直感による昔話分析は「桃太郎の誕生」に見られるが、先生は一つ一つの文献に当りながら、「海神の乙女」「杜の乙女」「天津乙女」「絵姿女房」を構造的に把握され、絶えずヨーロッパの昔話による昔話の型と比較されることで、日本の昔話の特色が明確になるという形で描き出してくれる。そしてそれは世界の中での日本の昔話のパーソナリティといったものの指摘であると言えそうである。

こういった個々の比較の底にあるのは、先生の実証主義的な学問への態度と共に、もう一つは先生の「昔話の生物学」の構想のしからしむものなのではなかろうか。昭和五十年に発表された「昔話の機能的研究への提案」（本書三巻）では昔話が語り手の性格を反映するという観点から、昔話の語り手と聞き手の関係を明らかにしなければならないことを論じ、そのため、昔話の内容の意味するところだけでなく、昔話が語られる座なり、語り手と聞き手の両者を包む社会環境の問題を把握しなければならないことを指摘するのである。「語り」などである。従来、この種の問題は昔話研究者にとっては、昔話の周辺にある話題にかかる、共同体の中での昔話の「語り」の意義などである。従来、この種の問題は昔話研究者にとっては、昔話の周辺にある話題にすぎなかつたが、生活の中での昔話の「語

なさり、その異同を比較され、まさに動植物の同定のお仕事を独自にすすめられている点に敬服したものである。もちろんこれで十分とは言えないことはこの巻の解説者たる小松和彦も認めているが、すでに大病後のこともあり、老境にさしかかった先生のすさまじい熱気を感じさせるものである。

こういった個々の比較の底にあるのは、先生の実証主義的な学問への態度と共に、もう一つは先生の「昔話の生物学」の構想のしからしむものなのではなかろうか。昭和五十年に発表された「昔話の機能的研究への提案」（本書三巻）では昔話が語り手の性格を反映するという観点から、昔話の語り手と聞き手の関係を明らかにしなければならないことを論じ、そのため、昔話の内容の意味するところだけでなく、昔話が語られる座なり、語り手と聞き手の両者を包む社会環境の問題を把握しなければならないことを指摘するのである。「語り」の約束が具体的に社会にどう生きていたか、共同体の中での昔話の「語り」の意義などである。従来、この種の問題は昔話研究者にとっては、昔話の周辺にある話題にすぎなかつたが、生活の中での昔話の「語

り」はその語り手の人生観をも語っていると言えるかも知れない。ある。

先生は今後の昔話研究は大きく二つに分れるだろうと語られる。『日本昔話大成』の完成をはじめ、進行中の『日本昔話通観』その他昔話資料の出版などで、ほとんど新種と見られるものが少くなり、期待がもてるのは日本の中では沖縄のものだけとなっている現状だが、その点では国内における昔話の調査は、仮説を立てて、一つの研究目的をもつてのものになるだろうし、二つには集まつた資料によつて、机上での比較民話学、ひいては文化人類学的な方法を駆使して、他国との比較などであるという。このことは同時にもと詳細な計画的な、そして世界的な研究に他ならない。

このような意味で『日本昔話集成』及び『日本昔話大成』の上に『比較研究序説』が積みかさねられ、研究の新しい方向が指向されたと見たい。しかし、先生の研究について見れば、「語り」についての語り手と聞き手の問題は依然として残された課題であると言える。そのことは從来の昔話調査が単に昔話の蒐集に重点が置かれすぎたためと言うことであらうし、モチーフや構

造の分析を通して得たものだけでは、語りの内面に入つて行くことは不可能であると同時に、具体的に昔話が社会の中でどう生きていたかという点もまた方向が示されただけで、形をなしていない。さらには、今までの日本の昔話研究が分類論に集中して、構造論・心理分析などの分野、さらに

『関敬吾著作集』（全九巻）

宮田登

関敬吾著作集の完結は、近年の民俗学界におけるトピックの一つである。柳田国男以後の日本民俗学の行方については、いまだに明確さを欠く現状であるが、関敬吾は、身をもつて一つの方向を見定め、これを主張してきた数少ない理論的指導者である。今この著作集によって関の全貌をとらえることを可能にさせてくれることは、これからも民俗学世代にとっての恰好の水先案内となるだらう。

最近、復刻された関と柳田国男の共著『日本民俗学入門』は、柳田のすすめにより、関が作った民俗学概論をかねた調査法

民俗学的研究までに進んで行かなかつたことは止むを得なかつたとしても、先生の著作集によつて確立された研究の土台に立て、初めてそのような展望がひらけたと言えなくもない。

（たけだ　ただし・山形県立米沢東高校）

タイラーの『原始文化論』を読むように指示したという。その後昭和八年、柳田の『桃太郎の誕生』の公刊を契機に、昔話研究に傾斜していく。当時、唯物論が若い世代に流行し、関もマルクスやエンゲルスの洗礼を受けたが、しかし柳田に強く引かれていた。『桃太郎の誕生』をはじめて読んだ時のこと、関は次のように語っている。「私は思想的に激しい動搖があつたものですから、それを買ってきて読んでみたんです。雑誌で読んでいたときと違つて全体を読むと何かそこに一貫したもののが伏在している感じを受けたんです。そのとき思つたことですが、部分部分としてみると全体としてみると、かなり意味が違つてくるということを知りました」〔著作集〕8、九七ページ)。この姿勢が関の民俗学の原点にあるといって過言ではない。先の『日本民俗学入門』にも「部分ということもより民俗学全体を見直そう」という観点が貫ぬかれていたのである。

だから昔話研究にとり組みながら、つねに全體像の構成を心がける姿勢が読者に訴えかけてくる。昔話といえば、もちろん話題に目を向けるのは当然であるが、つねに背景の要素、社会性に視点が集中して

いく。これが、昔話研究をたんに口承文芸の分野だけに閉じこめさせない、関のもつ大きな魅力なのである。近年、クローズアップされた伝説研究についても、関は当初から、その社会的、信仰的背景を歴史的に研究すべきことを説いていたことが分かる(『著作集』3)。この場合、注目されるのは、伝説の歴史的研究というのではなく、伝説を作り出した背景を歴史的に研究することだとしている点で、「伝説を作り出すところのもの」つまり信仰の問題を中心にすえようとしたことである。

こうした視点は、口承芸能の分野の伝説研究に限定されない広がりを与えてくれるのであり、民俗学としての伝説研究の位置づけを明確にさせているといえよう。

著作集の全体の構成からいって、1~6までが、口承芸能に関するもの、7~9まではが民俗学一般に関するものと大別されている。前者の分野については、武田正氏が別に紹介されているので、後者の部分について、さらにくわしく述べてみたい。

とはいっても、この両者を密接不可分の体系としてとらえようとする関の立場からいふと、前者にも、筆者をひきつけて止まない主題が展開している。たとえば『著

作集』4では、話型研究と民俗との関連の二つのまとまりを編者が作っている。このうち後者の方をみると、「成年式の反映としての昔話における老人」という二論文が収録されている。成年式の社会性を反映した日本の昔話の構造についての関の見解はすでに定説化されているので、ここでは触れないが、老人の問題については、現在の文化人類学・民族学界の一つのトピックになつてゐる。関は、日本の昔話の老人を分析しながら、子供のない善良な老夫婦が富を得ること、又、神に祈願して子供を授かること、を指摘している。そして後者の場合、神の申し子は異常出誕によって得られるもので、その子と老人との結びつきは深く、それは老人と孫の深い潜在的要素を暗示するものだろう。いわゆる姥棄伝説についての説明も、この背後に、いつたん山に棄て、ふたたび家に帰つてくる習俗を想定し、老人は再生して、子供となり長生するという呪いが現実に伝承されていたものと推察している。今から二〇年前の論文ではあるが、現代の社会的問題に對しても、依然生き生きとした発言であることはいうまでもない。

りは、未来を語る若い科学である」と主張する関は、全体を見る立場から、当然のことながら「日本民俗学の歴史」を叙述した。これは日本民俗学史として、他を抜きん出た内容であり、『日本民俗学大系』²に発表され、その後の世代の指針となつていた。これは、『著作集』⁷に収載され、福田アジオによる適切な解説がつけられている。福田の解説で興味深いのは、マルクス主義と民俗学の関係についての関の見解である。たしかに関には「民俗学と唯物論」(『著作集』⁸)があり、これは、当時のマルキシスト志村義雄の対民俗学批判に対する反論として書かれたものであつた。この中で関は、マルクス主義そのものを批判したのではなく、日本のマルクス主義の立場を批判し、そこからは学問的に生産的な民俗学批判が展開しないことを述べている。関自身の人生でマルクス主義の洗礼を受けたことは事実であろうが、それにのめり込むことはなかったから、赤松啓介あるいは橋浦泰雄の民俗学観とは一線を画すべき性格があった。福田は、学史的展開の上で、関による唯物論的民俗学への批判があつて然るべきだというが、筆者には、関の唯物論世代ともいべき同時代感覚がそこ

に働いているように思える。同時代に生き、マルキシズムの洗礼を受け、それぞれ立場を異にした世代の基底には、思想的葛藤を同じうしたというアイデンティティを感じられる。この部分に限って珍しく明確さを欠く関の論法も、何となく分らぬものでもない。

昭和三〇年に出された『民話』(岩波新書)は評判をよぶものだった。これは『著作集』⁵に收められ、野村純一による当時の反響を踏まえた解説がある。関の真意は、フォーラクテールの訳語としての「民話」にあつてもしかわらず、「昔話」を使わなかつたといいう理由で、非難と誤解を受けたのであった。柳田に師事していくも、柳田の好む「昔話」をあえて用ひなかつた点に關の面目があろう。一方に木下順二らしいわゆる進歩的知識人の「民話運動」があることを関が知らぬはずはない。関の「民話」論は、昔話を含めて、「民話」の純粹な學問規定を行なうところに真骨頂があつたことは、「民話」を読めばすぐ分かる。しかし関が柳田と同様な立場で、いわゆる「民話運動」を否定していたのかというと、どうもそうとは感じられない。むしろ

全体を見て総合化する志向からいえば、

「民話運動」もその中の部分として位置づけられるべきだと考えていたのではなかろうか。

『著作集』をじっくりひもどいていけば、実際にさまざまな現代民俗学の遭遇している課題が引き出されてくる。以下紙数の関係から三点だけに絞つて記しておきたい。一つは戦後の農村の著しい変貌に対処した民俗調査の項目を考えるべきだと述べている点である。それは民俗の担い手を社会、経済的状況との関連において分析する方法として確立させるために必要だということになる。これはS・エリクソンの「地域民族学」(regional ethnology)に導かれた観点であり、民俗学理論の積極的な導入を図る関の若々しさを感じさせる。

二つは、都市民俗学の活用を論じている点である。ヨーロッパ民俗学の動向を知るならば、都市民俗学は、まず先に追究されるべき領域であったが、日本民俗学は、柳田民俗学の強い規制を受けて発達したため、その分野は永い間空白であった。しかし都市民俗学がはじめから無視されていたわけではなかつた。近年相次いで物故した桜田勝徳、竹田聰洲、高取正男らの論考などをみてもその点は留意されていた。関の

「民俗学と郷土文化の問題」（『著作集』8）は、昭和一九年に書かれたものだが、「都市住民層の生活もまた民俗学の重要な関心である。実際的にはまだ問題となつてないが、都市の住民層の間にもそれ自身の伝統的文化があり、東京には江戸文化の伝統があり、また生活様式があつた」（『著作集』一三七四ページ）とし、これを現代民俗学の課題とすべきことを説いている。さらにこれは、昭和三十年代の「日本民俗の社会的性質」にもくり返し、重要課題としてあげられているのである。

第三に、日本の民俗文化には、東と西の差異があり、これが地域的な精神態度となって表出している。そこで民俗学が「東西」の視点をもつと注意すべきであるという考え方をもつてゐる点である。民俗文化の相対化という観点からいえば、この考え方は、宮本常一そして近年大きな潮流となりつつある坪井洋文の畑作農耕文化論にも底する。そして宮本の主張をうけた網野善彦が、歴史学の中にその観点を導入することによって、歴史学と民俗学の接合を図ろうとする動向とも関わっている。

閑敬吾は、柳田民俗学のもつ個別から全体への志向を、自らの文脈の中で打ち出そ

うとしていたことが、この『著作集』のいた所からひびいてくる。それは次の世代への新鮮な刺激に満ちた贈物として受け渡されるべきものだろう。そして「閑先生は奇妙な孤立を愉んで居られる」という山口昌男の述懐（閑敬吾先生との三時間『同朋』一八号）は、少なくとも、学問を持続させてきた閑の活力の根源なのかも知れない。と思つたりもする。

次に『著作集』各巻の書名と所収大項目を掲げる。

第一卷

『昔話の社会性』

日本昔話の社会性に関する研究

昔話の基礎研究

第二卷

『昔話の歴史』

昔話の歴史・昔話と文献伝承

『昔話研究法と伝説』

昔話の分類・伝説研究・昔話の周辺

第三卷

『昔話研究法と伝説』

昔話の分類・伝説研究・昔話の周辺

第四卷

『日本昔話の比較研究』

話型研究・民俗との関連

第五卷

『昔話の構造』

民話概論・東西の民話観

第六卷

『比較研究序説』

比較研究序説・海幸・山幸神話
の南洋起源か・書評と紹介

第七卷

『民俗学の歴史』

日本民俗学の歴史・日本の民俗

社会・沖縄の民俗社会

『民俗学の方法』

日本民俗学の課題・日本民俗学の方法

第八卷

『民族学と民俗学』

ヨーロッパの民俗学・日本の民

俗信仰をめぐって・隨筆・書評

（みやた・のぼる・筑波大学）